

## 大阪大学グローバルビレッジ津雲台のオープン



夢はバラ色

栗 本 英 世\*

Opening of the Global Village Tsukumodai, Osaka University

Key Words : international student hostel, staff apartment,  
global university, co-creation

### オープニングセレモニーの開催

2020年10月14日、大阪大学グローバルビレッジ津雲台（以下、GV津雲台）のオープニングセレモニーが開催された。吹田市津雲台に位置するGV津雲台は、教職員およびその家族、留学生と日本人学生の総勢数百名が共住することになる、国立大学法人としては全国最大級の施設である。10月1日から入居が開始されている。オープニングセレモニーは、大阪大学、(株)パナソニックホームズ、(株)合人社計画研究所、(株)松村組の主催で執行された。

三つの会社は、GV津雲台の建設と管理運営を請け負っている。私も、副学長、および学生生活委員会委員長として列席した。

式典では、西尾章治郎総長による主催者を代表しての挨拶の後、来賓である後藤圭二吹田市長と山崎雅男文部科学省大臣官房文教施設企画・防災部長からの祝辞があり、最後に井上二郎パナソニックホームズ代表取締役社長の挨拶があった。西尾総長は、以下のように述べている。



オープニングセレモニーで挨拶を述べる西尾総長



\* Eisei KURIMOTO

1956年1月生まれ  
京都大学 文学部 哲学科 (1980年)  
現在、大阪大学 副学長  
人間科学研究科 教授 文学修士  
専門／社会人類学、アフリカ地域研究  
TEL : 06-6879-8130  
E-mail : kurimoto@hus.osaka-u.ac.jp

このような国際的生活環境の場において、地域の皆様と積極的な交流を行う各種プログラムを実施していくことで、人と人との新たなインタラクションを生み出してまいります。そして、ここを起点として、文化、言語、ジェンダーを超えた多様性を育む環境を充実させることで、世界に開かれたグローバルな大学へと進化してまいります。



オープニングセレモニーにおけるテープカット

後藤市長は、GV 津雲台が拠点となって地元の市民を巻きこんだ共創が生まれ、共生の実現に貢献することに対して期待を述べた。

このように、GV 津雲台は、たんなる学生寮と教職員宿舎の複合施設という意味合いを超えた役割を果たすことを期待されている、大阪大学の看板となるべき新施設として発足した。

### グローバルビレッジ津雲台の全容

さて、GV 津雲台の用地は、教職員宿舎の跡地である。総面積は約 2 万 4000 m<sup>2</sup> ある。立地は、阪急千里線山田駅の西方、徒歩数分の丘の斜面である。大阪モノレールの山田駅の駅前でもある。大阪大学の豊中キャンパス、吹田キャンパス、箕面キャンパスのいずれも、通勤・通学の便がよい。とくに吹田キャンパスとは、自転車なら片道 12、3 分の距離にある。

跡地の整備は、PFI (private finance initiative) 事業によって行われた。具体的には、パナソニックホームズを代表企業とし、合人社計画研究所と松村組で構成されるコンソーシアムが建設を請け負ったのである。またこの 3 社の出資によって、特別目的会社 (SPC)、(株) PFI 阪大グローバルビレッジ津雲台が設立され、30 年間の事業期間中の維持管理と運営の業務を担っている。

2 万 4000 m<sup>2</sup> の敷地は二つに分けられ、約 56% を占める部分が狭義の大阪大学 GV 津雲台（学生寮と教職員宿舎）、残りの 44% が「民間付帯施設」となっている。民間付帯施設の土地は、大阪大学から SPC が借用し、パナソニックホームズが建物を建設・所有の上、運営している。事業期間は 50 年間で、終了後は更地にして大阪大学に返還される。民間付

帶施設の中身は、賃貸住宅やシェアハウス、サービス付き高齢者向け住宅のほか、医療施設、飲食店、コンビニエンスストアなどが開業する。



グローバルビレッジ津雲台平面図  
(出典: <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000020.000022927.html>)

SPC の総事業費は 123 億円である。このように、旧教職員宿舎跡地の再開発は大規模な事業であるが、大阪大学の支出はゼロであることが、PFI 事業の特徴である。企業との連携によるこうした大学用地の開発プロジェクトは、ひと昔前には想像もできなかつた、国立大学法人の新たなあり方を示している。この点でも、GV 津雲台は注目されるべき新事業であると言える。

さて、民間付帯施設を除いた GV 津雲台の詳細を見てみよう。約 1 万 3000 m<sup>2</sup> の敷地に三棟の建物があり、延床面積は約 2 万 3000 m<sup>2</sup> ある。その内訳は、学寮と教職員宿舎である。学寮のほうはシェアハウス型（5 人ユニット、7 人ユニット、9 人ユニットの 3 種類）で定員 300 名。うち四分の三は留学生に、



建設中の民間付帯施設。2020 年 8 月 27 日撮影。

四分の一は日本人学生に割り当てられている。教職員宿舎は、ワンルームの単身者用が320戸、1LDKの単身者用が40戸、そして世帯用の3LDKが40戸という構成になっている。なお、単身者用ワンルームのうち200戸は看護師に割り当てられている。また、96戸は当初の予定を変更して学生が使用することになった。



正面から見たGV津雲台。2020年8月27日撮影。



学生寮9人ユニットの共用リビングルーム・台所。  
2020年8月27日撮影。

GV津雲台学生寮と宿舎の第一印象は、「立派できれい」である。古色蒼然たる学寮や、家賃が安いだけがとりえの老朽化した公務員宿舎に居住した私としては、隔世の感がある。

### 「文化創造型ビレッジ」を目指して

オープニングセレモニーにおける「挨拶」から引用した前掲文と内容が重複するが、大阪大学グローバルビレッジのHPにおいて、西尾総長は以下のように述べている。

グローバルビレッジ津雲台は、学寮、教職員宿舎として同じ敷地内に一体的に整備します。留学生を含むあらゆる学生、教職員が同じ場所で生活し、活発なコミュニケーションを可能とする国際的生活環境を実現することにより、地域との交流を通じた人と人との新たなインタラクションを生み出すなかで、本学のモットーである「地域に生き世界に伸びる」人材の育成をはかります。

また、2021年4月にオープンする箕面新キャンパスに設置されるグローバルビレッジ箕面船場とあわせて、大阪大学のグローバルビレッジは、「本学の教育研究環境のグローバル化を促進し、異なる言語、文化的背景を持つ人々がともに暮らすことで、共創イノベーションを生み出す場となるよう切に願います」と総長は述べている。GV全体とGV津雲台に関するHPのキャッチコピーは、それぞれ以下のようになっている。「グローバルな生活環境から人と人とのインタラクションが芽生える新しいハウジング施設が誕生します」「留学生を含む学生および教職員が交流できる文化創造型ビレッジ」。

さて、施設という「器」は完成した。しかも、とても立派な器である。新型コロナウイルス感染拡大の影響で、留学生の入寮は遅れているが、いずれ近い将来には定員はほぼ埋まり、GV津雲台は、800名程度の学生、教職員とその家族が生活する場所になるだろう。加えて、そのすぐ隣には、高齢者福祉や医療など、さまざまな機能を備え、さまざまな人が集う民間付帯施設もある。次の課題は、「中身」をどうするかだ。どうすれば、この新しい空間が、「人と人との新たなインタラクション」が生み出される「文化創造型ビレッジ」になるのか。しかも、このインタラクションには、GV津雲台内部だけでなく、地域との交流も含んでいる。吹田市の地元の皆さんには、GV津雲台に大きな期待を寄せていると聞いている。この期待にも応えなければならない。

GV津雲台が、新しいなにかが生まれる場とするためには、なんらかの「仕掛け」が必要だろう。そのひとつとして、私が学生生活委員会委員長として取り組んでいるのが、寮生に対する教育プログラムと、「レジデント・チューター」(RT)を活用することである。教育プログラムとしては、地域の現場

でのフィールドワークも含む、共生や共創について学ぶことができるメニューを現在検討中である。RTは、このプログラムの企画運営だけでなく、寮生間のインタラクションの推進に積極的な役割を果たすことが期待されている。6月に公募を行い、多数の応募者の中から国際交流や共生に関心のある優秀・有能な学生4名を選考した。RTたちはすでに学寮に居住している。今年度末には、さらに6名を追加し、RTは合計10名になる予定である。

また、人間科学研究科に付置されている未来共創センターでは、稻場圭信教授を代表者として、「グローバルビレッジ・コミュニティ・プロジェクト」が推進されている。これには、PFI事業を推進している企業の担当者の皆さんも参加している。学生生活委員会が構想・検討中の教育プロジェクトは、学内のこうしたプロジェクトとも連携していく予定である。

学生生活委員会で構想しているのは、寮生である学生たちを軸として、GV津雲台の理念を実現していくことである。私は担当責任者として、この試みはぜひ成功させたいと考えているが、これは「仕掛け」のひとつにすぎない。GV津雲台が、学生と教職員だけでなく、地域の人びとも魅力を感じて集う

場になり、大阪大学の看板のひとつとして発展し、言葉の真の意味で「グローバルな文化創造型ビレッジ」になるには、関係者のさまざまな努力が必要だろうと感じている。そして、複数の「仕掛け」をひとつつの「仕組み」にまとめあげていくためのビジョンも必要である。

### 参照ウェブサイト

「『大阪大学グローバルビレッジ津雲台』オープニングセレモニーを開催」(ニュース&トピックス)。  
<https://www.osaka-u.ac.jp/ja/news/topics/2020/10/1501>

「総長からのご挨拶」(大阪大学グローバルビレッジ)。  
<https://globalvillage.icho.osaka-u.ac.jp/>

「全国最大級の国立大学国際学生寮施設整備『大阪大学グローバルビレッジ津雲台』の供用を開始～国立大学法人のグローバル化と地域交流を実現～」。  
<https://prttimes.jp/main/html/rd/p/000000020.000022927.html>

(すべての写真は著者撮影です)

